『丹波年輪の里』を訪ねて

林野庁の補助事業「モデル木造施設建設事業」の一環として，林産試験場の敷地内に「木と暮らしの情報館」が建設され，６月３日にオープンいたしました。以来，多くの見学者で賑わっています。当協会では，この中で道内で生産されている民間木製品の展示やイベント等を行っています。

先般，今後より多くの人達が情報館を訪れ，木材の良さを理解してもらえるよう，本州の先発展示施設を見学する機会に恵まれました。それぞれ模索や創意工夫を重ねながら，運営を行っていましたが，ここでは広大な敷地で県民の余暇活動と木材利用を組み合わせ，積極的な運営を行っている「丹波年輪の里」を紹介することにいたします。

はじめに

大阪駅から福知山線でおよそ１時間20分，兵庫県柏原（かいばら）市の緑の山々に囲まれた丹波の森に，昭和63年４月「兵庫県立丹波年輪の里」が生まれました。

およそ12億円の巨費を投じ，6.6haの広大な敷地を持つこの施設は，兵庫県民が木とふれあい，木と親しみながら，文化活動，スポーツ活動，レクリエーション活動（以下ＣＳＲ活動という）を楽しむ憩いの場とするだけでなく，県民の木に対する理解を深め，木材産業の振興に結びつけたいとする願いから生まれました。

この願いを実現するため，次の３つの理念をもとに施設を整備しました。

①経済が発展し生活が豊かになるにつれて，余暇活動が多様化し，特に野外を中心とした豊かな環境の中で，創造，創作活動を行いたいとする県民の願いが強く，この願いに適切に応えるためにクラフト創造遊苑を設置する。

②クラフト創造遊苑は，丹波地域の歴史・文化・伝統産業の集績を生かすと共に，21世紀に向けて県民各層の余暇活動の新たな展開の場となるよう，特に木工を中心としたクラフトを通じての創造的な余暇活動実習基地としての機能を果たせるよう整備する。

③一般県民へ木の良さを普及啓発し，木と人間とのふれあいの中で，県民の余暇活動と木材の新たな利用開発機能を結合させ，消費者ニーズに即応できる木材産業の振興拠点としての整備を図る。

この理念をもとに施設を整備し，運営を行っていましたが，ここでは施設や研修，イベント等の事業概要について紹介します。

施設の概要

1.　所在地

兵庫県氷上郡柏原町田路102-3

☎（0795）73―0725

2.　施設の特徴

この施設は建物と広場等，８つの施設から成り立っていますが，緑に囲まれた広々とした空間の中で，クラフト活動をはじめ，自由にのびのびとスポーツ・レクリエーション活動が行えるようになっています。

特に，クラフト活動については，初心者から専門家までの各人が，それぞれの立場で木工・手工芸に親しみ，学習し，創作することが可能になっています。

また，施設のあらゆる場に，木を最大限に取り入れ，施設全体を全国的にもユニークな木の文化に親しめる場となるよう配慮しました。

具体的な施設内容は次の通りです。

・木の館　773 m²

多目的ホール，展示室，会議室，事務室等からなり，木に関する情報提供，技術相談，木製品の展示・販売，年輪の里全体のインフォメーションを行っています。

・クラフト館　625 m²

工作室，機械室，研修室，ＣＳＲ委員会室等からなり，クラフト指導，工具の貸し出し，木工教室，委託加工等を行っています。

・クラフトアトリエ　276 m²

木工を中心としたアトリエ工房４棟（90 m² 2棟：アトリエ２，浴室，休憩室等，48 m² 2棟：アトリエ，休憩室等）からなり，専門的な多様なクラフトに対応できるようにしています。

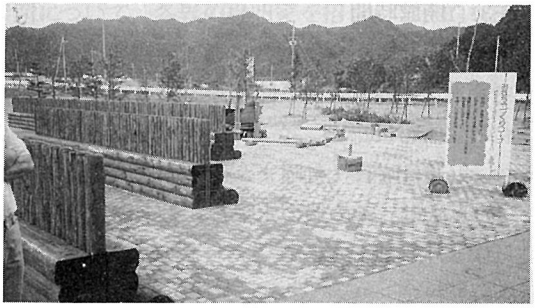
木　の　館

クラフト館

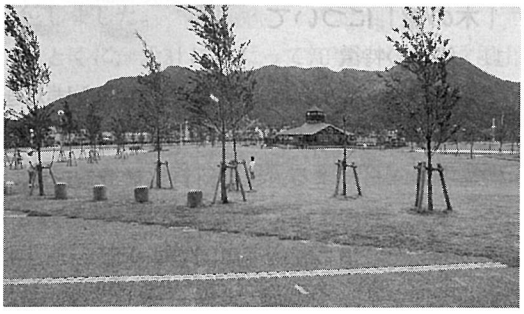
クラフトアトリエ

木工工作風景

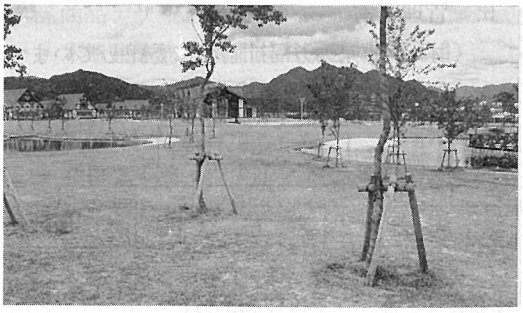
年輪の里構内



野外クラフト広場

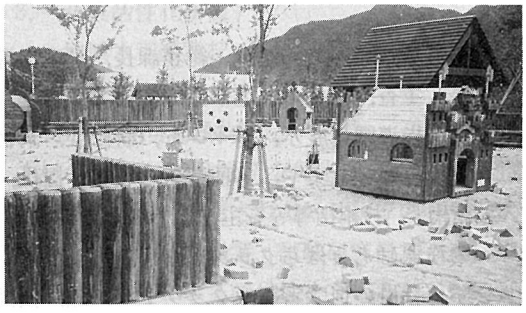


レクリエーション広場



芝 草 広 場

空 中 回 廊



ガラクタ広場

・イベント広場　約10,000 m²

野外ステージおよび夜間照明設備を備えクラフトイベント，クラフト展示，野外クラフト，野外音楽会，スポーツ，レクリエーション等に利用できるようになっています。

・芝生広場　約15,000 m²

野外展示園，土の遊園地，水の遊び場（深さ10～50cm，約300m²）等からなる広大なレクリエーション活動の広場となっています。

・水辺のウッディレストラン　232 m²

木製のインテリア・食器等を用い，落ち着いた雰囲気で，食事や休憩ができるようになっています。

・わんぱく広場

空中回廊（延長約100m）とガラクタ広場（丸太壁に囲まれた砂と木片の約800m²の空間）があり，親子で楽しめる様になっています。

・駐車場　約200台分

3. 開館時間

午前9時から午後9時まで

受付時間は午前9時から午後5時まで

4. 休館日

毎週月曜日（月曜または火曜日が国民の祝日のときは，その週の水曜日）および12月29日から1月3日まで。

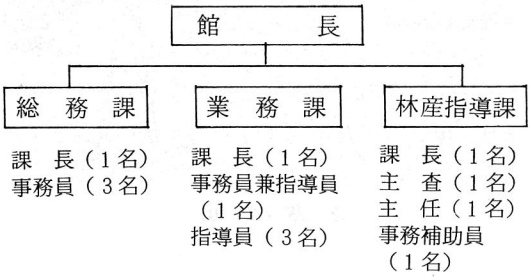
5. 料金

入苑料は無料ですが，施設使用料やクラフト材料費は，料金表によって徴収しています。

6. 管理運営

（財）兵庫県勤労福祉協会に委託しています。

7. 組織および職員構成



職員数14名，うち館長，総務課長，林産指導課長，主査，主任の5名が県庁職員です。

林産指導課は展示，イベント，研修会，講習会等の企画・立案や，各種情報の収集・提供，技術相談，技術指導等を主な仕事としています。

業務課はもっぱらクラフト指導を担当しています。教員の退職者等，クラフトの知識，技術を備えた人達で構成されています。

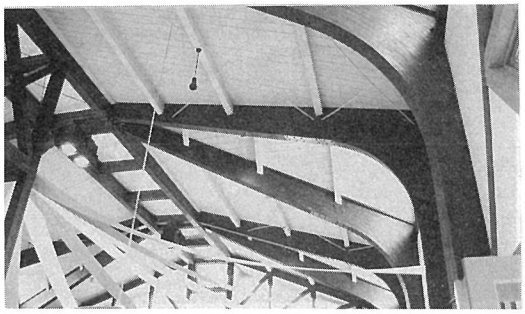
8. 事業予算

事業費総額は約1億円で，おおまかな内訳は次の通りです。

1億円
- 人件費　6,000万円
- 管理費　3,000万円
- 運営費　1,000万円

1億円はすべて県費ですが，このうちの大半はＣＳＲ基金を当てています。

ＣＳＲ基金とは兵庫県の法人が県法人税の1％分を超過負担したもので，勤労者の福祉のために使用されるものです。



木の館内部

「木の館」について

1. 建物の特徴

大空間を支え，かつ屋根面に自由度を持たせるため，県産材（宍粟スギ）を使用した大断面構造用集成材による大棟梁斜行梁構造を採用しています。この工法により，大架構に見られがちであった屋根や壁面の単調さを克服しています。

2. 建築技術上の特徴

従来，大空間を構成する場合はトラス構造（クラフト館はトラス構造）が一般的でしたが，ここでは次のような工法を採用しています。

・屋根の荷重は「2本の棟梁と3組の棟持柱」で分散させ，軸組負担を軽減させました。

・水平力については，屋根面に16本の斜行梁（スギ大断面湾曲集成材）を設け，屋根面の剛性を保ちながら外周軸組へ伝える工法を採用しました。

・壁面の補強は，通常はブレース工法（筋違（すじかい））ですが，ここでは厚板はめこみ方式（45mmの厚板による耐力壁構造）を採用しています。

・棟梁をダブルにかけ，その間にトップライトを，また斜行梁に越屋根を設け，屋根面からの採光を良くする工夫をしています。

3. 彩色の特徴

日本の木造建築においては，一般の民家は構造材，造作材ともに彩色することを基本としてきました。彩色材料は地域によりまちまちですが，例えばベンガラ，スミ，カキシブ等を下塗り材料として，その上をウルシ，菜種油等で保

護するやり方が一般的でした。

木材に対する彩色は，広く欧米諸国でも見られます。とくに，北ヨーロッパではハーフティンバー（洋風真壁造）様式においては，漆喰仕上げの色壁と重量感のある構造材（彩色）のコントラストが建築意匠の基調をなしています。

年輪の里の建物は，こうした和洋折衷の知恵を現代的な感覚のもとに採用したものであり，とくに利用者の主体と想定される青少年に，「おとぎの国」を連想させる効果をねらって配色しました。

とくに，設計にあたって知事から「北欧風」の意匠が指示され，そこでの基調色を引用し，サッシ類は赤，緑系統，柱，板壁は黒，漆喰系はクリーム，ピンク，茶系を採用しました。

4．木材使用上の特徴

木材の欠点である部材収縮や歪みを避けるため，梁・柱については集成材を使用し，内装材料も木質材料を使って，木の香り・木のぬくもりを感じさせる工夫をしています。

5．規模構造

木造一部二階建	建築面積705 m²	多目的ホール 176 m² 図書資料室 118 m² 研修室81 m²，その他
	延床面積773 m²	

6．木材使用量

集成材	61 m³	スギ直材19 m³，スギ曲材39 m³ ヒノキ 3 m³
一般材	200 m³	スギ壁19 m³，ヒノキ土台12 m³ 野地板48 m³，根太・大引19 m³ 小屋梁51 m³，その他51 m³

木材技術研修会

木材業界の振興を図るため，製材業・木工業等いわゆる川下関係業者が抱えている今日的な技術課題について，各界の専門家を招き，実務的な技術研修や現地指導を行っています。

研修はコース別研修，テーマ別研修，産業活性化研修の３種類がありますが，昭和63年度では合計35回の研修を行い，延べ1,000名の受講がありました。

平成元年度の研修は次のように計画し，実施しています。

1．コース別研修
- 製材加工技術
- 商品デザイン向上
- 木造建築物・設計施工技術

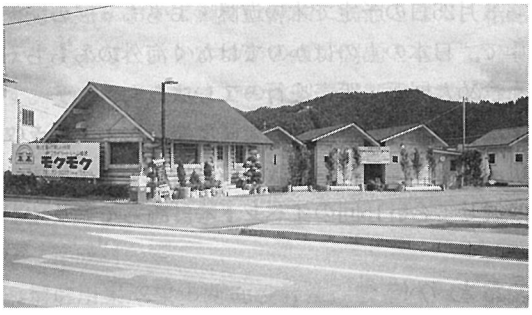
2．テーマ別研修
- 製材業の経営技術
- 鋸目立て加工のポイントと工程管理
- 新しい加工木材の性能・用途
- 木材販売における電算化
- 木造３階建住宅の技術課題
- 針葉樹材の人工乾燥の実態
- 住宅資材における正しい木の使い方

3．産業活性化研修
- 地域木工産業起こしの現状と課題

木材利用開発検討会

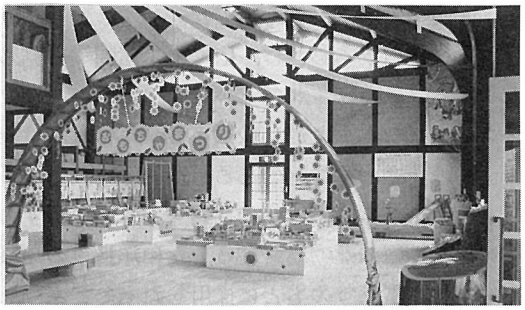
木材の新たな利用開発を促進することを目的に，各地の企業で生産されている個々の製品，試作品を取り上げ，学識者，試験研究員，企業技術者，流通業者等による商品性を高めるための検討と具体的な提案を年２回行っています。

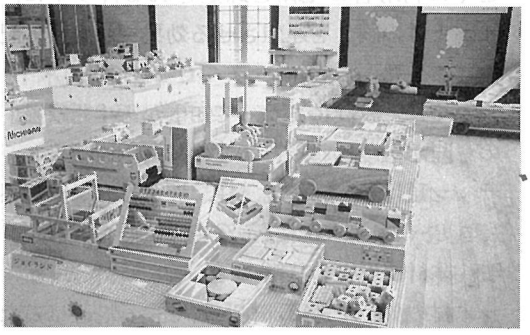
昭和63年度では，中空ログ部材，ヒノキ階段セット，ヒノキ壁・床材の検討と提案を行いました。



ログハウスフェスタ

建設中のログハウス





おもちゃまつり

ログハウスについては，乾燥，塗装技術を含めて商品化のめどが立ち，実際に流通するようになりました。私達が訪れた時には，年輪の里の道路を隔てた向かい側の土地に，この成果を生かす形で丹波木材協同組合が主催してログハウスフェスタの準備が進められている最中でした。地元のスギや米松等を用いたログハウス８棟を建設中で，その内の１～２棟がフェスタ終了後年輪の里に移設され，ログハウスや部材の展示，販売に利用されるとのことです。

本年度は残された課題であるヒノキ材の階段について，接着・塗装の面から商品化の検討を行うことにしています。

イベント

年輪の里では，建物の内外を利用して種々のイベントを行っています。平成元年度も「ひょうご木のフェア」と題して，４月23日から６月25日にかけて全国木工村おこし物産展，暮らしの中のハイテク木材展，木工機械器具展を行いました。

私達が訪れたときは木の館の中で，７月23日から８月25日の予定で木の遊具・おもちゃ展の開催中で，日本のものばかりではなく海外のおもちゃも含めた展示，販売を行っていました。

その他木製食器展や親と子で楽しむ木工クラフト，木工クラフト担当教員実技研修等大小規模おり混ぜて合計15回のイベントを計画しています。

おわりに

以上，「丹波年輪の里」の建物や事業の概要について説明してきました。ここではより多くの人達に利用されるよう年輪の里友の会を作り，会員を募集しながら施設のＰＲに努めているとのことです。たまたま私達が訪れたとき子供会のグループが木工工作を楽しんでいましたが，この施設が県民に親しまれ，根付きつつあることを実感として感じました。しかも施設は整備が行き届き，清潔感にあふれていましたが，昨年度は20万人の人で賑わったことも，むべなるかなと思いました。

この広い敷地に足を踏み入れ，施設を見学し，運営に携わる人数や予算規模を聞かされたとき，余暇を利用した健康作りと木材産業の振興にかける兵庫県および県民の並々ならぬ決意を見せられた思いでした。また，展示施設に遊びの場，食事の場，休息の場を併設することは，人をひきつける上に大きな効果があることも教えられました。

「丹波年輪の里」を見学しながら，私達の「木と暮らしの情報館」も，将来こんな形の拡充整備が行われればとの思いを強くした次第です。

（文責　山内　賢治）